

宮古島のパーントゥ

今 林 直 樹

はじめに

2018年11月、日本の「来訪神 仮面・仮装の神々」がユネスコ無形文化遺産に登録されることが決まった。その構成は次の10件である。甑島のトシドン（鹿児島県薩摩川内市）、男鹿のナマハゲ（秋田県男鹿市）、能登のアマメハギ（石川県輪島市・能登町）、宮古島のパーントゥ（沖縄県宮古島市）、遊佐の小正月行事（山形県遊佐町）、米川の水かぶり（宮城県登米市）、見島のカセドリ（佐賀県佐賀市）、吉浜のスネカ（岩手県大船渡市）、薩摩硫黄島のメンドン（鹿児島県三島村）、悪石島のボゼ（鹿児島県十島村）。このうち、甑島のトシドンは2009年に代表リストに登録されているので、新たに9件が構成資産として加わったかたちとなっている。

本稿では、上記の中から沖縄県宮古島市の島尻地区に伝わる「宮古島のパーントゥ」を取り上げて紹介してみたい。

1. 来訪神

はじめに、来訪神について確認しておきたい。「無形文化遺産の来訪神行事」についてまとめた民俗学者の福原敏男は、広義の「来訪神」概念を「可視/不可視を問わず、常には海の彼方や山の頂などの異郷に在し、村の祭りや年中行事に訪れ、村落共同体を祝福して厄を祓い、終れば異郷に還る神々」としつつ、今回のユネスコ無形文化遺産への提案と登録については観念上、舞台上の来訪神は想定されておらず、可視化・具現化された民俗行事が対象とされたとしている〔保坂・福原・石垣編：2018：13-14〕。来訪神が「仮面・仮装の神々」とされるのはそのためである。『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館、2008年）では、来訪神を「外界から地域社会に、期日を定めて訪れ来る神」とし、「来訪神は仮面や草木などを身にまとい、場合によっては特別な持物をもつ異形の姿で出現し、目に見えるかたちで現れるのが特徴である」と記すとともに、「姿をもたない観念的な神」を「招来神」と呼んで来訪神とは区別している〔渡辺・岡部・佐藤・塩月・宮下編：2008：550〕。

福原が示した広義の来訪神は海の彼方や山の頂などの異郷に常在する。すなわち、来訪神は海の彼方や山の頂から村落などの地域社会に来訪する神である。この点について、住谷一彦とヨーゼフ・クライナーは「来訪神の考え方の基礎は、あの世とこの世の厳然たる区別であり、神は時を決めてあの世からこの世を訪問する」と記し、続けて「これにいわゆる再生の思想が結びついているのであって、神が現れるたびにこの世は再生し、その起

源にたちかえって新しくやり直すのである」と記している〔住谷・クライナー：1977；16〕。住谷とクライナーによれば、来訪神が常在するのは海や山といった地理的空間ではなく、「あの世」として理解される他界である。これを受けて、吉成直樹は、主として沖縄の先島諸島に伝わる来訪神行事を対象として取り上げつつ、メラネシアからの視線も比較の対象として取り上げ、来訪神を「死と再生の性格によって特徴づけられる」存在として理解し、考察している〔吉成：2003；55-92〕。

福原の示す広義の来訪神の来訪の目的は「村落共同体を祝福して、厄を祓う」ことである。この場合の「祝福」には、沖縄の豊年祭の際に来訪神が現れる例などを考えると、農作物と密接に関係し、村落共同体に豊穰をもたらすことが主たる「祝福」として含まれることが理解できるであろう。この点は、来訪神が訪れる期日にも関わってくる。西表島の祖納地区や干立地区でミルク神を迎える行事や石垣島のマユンガナシの出現が「節」「節祭」(シチ)と呼ばれるのは象徴的である。厄払いについては宮古島のパーントゥにみられる。他方、前述の住谷とクライナーおよび吉成の解釈では地域社会に「再生」をもたらすことが来訪の目的となる。

2. パーントゥ

沖縄県の宮古島には「パーントゥ」の名前を持つ祭祀が、北部の島尻地区と南部の上野野原地区に伝わる。「パーントゥ」とは、宮古島の方言で「怖い」「醜い」「異形の」存在を意味する。島尻地区では「パーントゥプナハ」と呼ばれ、上野野原地区では「サティバロウ」と呼ばれるそれぞれの祭祀には、見た目にも恐ろしい仮面を着けた異形の存在が出現する。その仮面を着けて神に変身したそのものがパーントゥである。島尻地区と上野野原地区のいずれのパーントゥも「国選択無形民俗文化財」に指定されているが、祭祀の起源や由来の点で、両者間にとくに相互関係があるわけではなく、内容もまったく異なっている。本稿では、このうち、より仮面・仮装の神の姿に近い島尻地区のパーントゥについてまとめていきたい。

はじめに、島尻地区についてまとめておこう。島尻地区は、宮古島の中心である平良地区から10 kmほど離れた、宮古島の北西に位置する集落である。2019年10月末現在で、世帯数が207戸、人口は337人である。この島尻発祥の地とされるのが元島である。元島には「ンナカガー」と呼ばれる井戸や貝塚が残っており、また土器の破片などが発見されていることからそこに人が居住していたことは確かである。この「島尻元島とンナカガー」は、1978年2月7日に市指定史跡となっている。また、元島には「クバマ」と呼ばれる海岸があり、ここに、1つとも2つとも言われるが、クバの葉に包まれた木製の仮面が流れ着いたことが島尻地区のパーントゥの由来になっている⁽¹⁾。ただし、仮面が流れ着いた時期については、今から百数十年前とも三百年前ともいうが、正確にはわからない。その後、時を経て、元島から内陸部へと集落が移って現在に至っている。

2007年度、島尻地区は農林水産省の「豊かなむらづくり全国表彰事業」で「アララガマ精神（負けじ魂）でパントウの里づくり」によって農林水産大臣賞を受賞している。これは島尻地区振興の取り組みとして始められたもので、事業の名前にもあるように、その取り組みの1つに島尻地区の伝統文化であるパントウ祭祀の継承が含まれている。

では、パントウとはどのような祭祀なのであろうか。

島尻地区では、旧暦の3月、6月、9月の年3回、「サトウプナハ」（里願い）と呼ばれる祭祀が行われるが、その3回目の9月に行われるサトウプナハに出現するのがパントウであり、したがって島尻地区の人びとは3回目のサトウプナハをとくに「パントウプナハ」と呼んでいる。

前述のとおり、パントウの由来は元島のクバマ海岸にクバの葉に包まれた木製の仮面が流れ着いたことにある。2004年以降、継続してパントウ祭祀の現地調査を行っている佐藤純子によれば、それは今からおよそ300年前のことであり、流れ着いた仮面は1つであった。その後、その仮面を用いて集落内の厄払いを行ったところ天災等にあわず、平穏な暮らしができたことから、その後も続けられたという[佐藤：2013；141]。いつの頃からかは不明であるが、現在ではパントウの仮面は3つ作られ、それぞれ「ウヤ（親）パントウ」「ナカ（中）パントウ」「ファ（子）パントウ」と呼ばれている。このうち、ウヤパントウの面は他の2つとは表情が異なり、目が吊り上がってかなり恐ろしい表情をしている。

パントウが出現するのは「ンマリガー」と呼ばれる井泉である。ここで島尻自治会の青年会に属する3人の若者が上記3つの仮面を着け、身体中に方言で「キャン」と呼ばれるつる草（シノキカズラ）を巻きつけ、「ミーピーツナ」と呼ばれる綱で腰をしぼる。そしてンマリガーの中に入り、沈殿し強烈な悪臭を放つ泥を仮面や自分自身の全身に塗り付ける。最後に、マータと呼ばれる「魔除け」を頭部に差し、手にグシャンと呼ばれる杖をもって、パントウへの変身が完了する。なお、パントウプナハは2日間行われるので、パントウは6体出現することになり、パントウに扮するのは6名の若者ということになる。

いくつか補足説明しておきたい。まず、仮面についてである。パントウの3つの仮面は木製であり、それ自体壊れやすいので、必要に応じて作り直している。島尻自治会の宮良保会長によると、ウヤパントウは有料で作製してもらっているが、ナカパントウとファパントウの2つの仮面については希望者が無料で作製しているとのことである。なお、宮良会長によれば、クバマ海岸に流れ着いた仮面は2つであったとのことである。

つぎに、ンマリガーについてである。ンマリガーは島尻地区の人びとにとっては重要な井泉である。ンマリガーはパントウが出現する場であるというだけでなく、毎年5月から6月のキノエ・ウマの日に行われる「シツ」（節）と呼ばれる祭祀に「バハミズ」（若水）と呼ばれるものがあるが、それは「前年のシツ以降に生まれた子の母親は、他人にみ

られぬよう真夜中にンマリガー（井泉）から水をくんできて、子どもにあびさせる」というものである〔大城：1985；6〕。宮良会長によれば、30年ほど前までは、子どもが生まれたときや、誰かが亡くなったときに、ンマリガーの上澄み水で清めていたが、現在はやっていないということである。すなわち、ンマリガーは人の生と死に深く関係している場であるということになる。来訪神が「死と再生の性格」によって特徴づけられるとする吉成直樹は、この点に注目して、ンマリガーを「死と再生」の象徴であるととらえている〔吉成：2003；62〕。

つぎに、ミーピーツナについてである。島尻地区の年中行事の1つに「スマッサリ」と呼ばれる祭祀がある。それは「ムラの厄（悪霊、悪疫）祓いの行事」で「ムラから厄を掃きだす」という意味である〔大城：1985；8〕。その内容について、大城学は次のようにまとめている。

ムラのまわりをワラ綱で囲み、また各家の門にもワラ綱を渡して豚の骨をつるした。ムラの入口にあたる東の坂道、狩俣への道、ウツヌスマへの坂、ニッパラにワラ綱を張り、それに豚の骨をさげた後、肉を肴に宴をはった〔大城：1985；8〕。

このスマッサリで用いられたワラ綱をミーピーツナといい、パーントゥがキャンを身体に巻くときに帯として用いる。平良新亮によれば、ミーピーツナは「8センチほどの間隔で、3本または1本と交互に、ワラの根が6センチぐらいつ縄の外へ突出するような形」で縄われ、「その縄を集落の入口の道路上に電柱または立木を利用して、地上2メートルほどの高さ（交通の邪魔にならないように）」張り渡し、「縄の中間ほどには、6センチほどに切りきざんだ豚の骨の切れはしひとつをゆわえておく」のだそうである〔平良：1985；34〕。宮平盛晃によれば、スマッサリ（宮平の表記はシマクサラシ）は村落内に災厄が侵入することを防ぐためのものであり、ミーピーツナはそのために村落の入口に張られる〔宮平：2018；47〕。これは村落の外から内に災厄が侵入することを防ぐもので、村落内の厄を外に掃き出すという機能とは異なっている。しかし、平良によれば、ミーピーツナは「集落から厄払いをした後、その悪魔がまい戻って来ないようにするためであるといわれている」と記していることから〔平良：1985；34〕、この点の判断は慎重にしなければならない。なお、宮平はパーントゥがこのミーピーツナを腰に巻くことから、スマッサリとの間に不可分の関係があると指摘し、パーントゥには除災の機能があると述べている〔宮平：2018；47〕。

最後にマータについてである。マータは、マータに用いる素材や魔除けの機能という点から、沖縄で「サン」と呼ばれる呪具に似ている。『沖縄民俗辞典』によると、「サン」は「食物を戸外に運ぶ時などに、邪霊によって食物の精が抜かれるのを防ぐために食物に添えられる呪具」であり、「藁芯やススキ、バショウの葉などの先端を結んだもの」である〔渡邊・岡野・佐藤・塩月・宮下編：2008；229〕。平良がマータの機能として紹介している事例にはサンに似たものもあり、平良は宮古島の風習としてその他に葬儀や畑作業での

事例、あるいは所有権を示すものとしてのマータの利用の事例を紹介している [平良：1985：39]。

ンマリガーで出現した3体のパーントゥは、まず元島のフツムトゥに行って礼拝する。その後、上里のトゥマズヤームトゥを訪れ、次いで中里、南里のムトゥを訪れる。

こうして、集落に現れた3体のパーントゥは、その後、各自で自由に行動し、道中で人を見つけると、大人であれ子どもであれ、誰彼かまわず泥を塗りつける。子どもたちは悪臭を放つ泥を塗られたくないのと、パーントゥへの怖さも手伝って走って逃げるがパーントゥに捕まって泥を塗られる。また、パーントゥは車などにも容赦なく泥を塗りつける。なお、前年のパーントゥプナハ以後に生まれた新生児がいる家や新築の家には必ずパーントゥが訪れて、新生児の顔に泥をつけたり、新築の家の壁などに泥を塗ったりするが、これは無病息災や厄除けのためであるとされる。

パーントゥが行動するのは2時間ほどである。この間にパーントゥは人やモノに泥を塗りつけてまわるのだが、やがて集落を去り、元島の海岸へと向かって行く。元島の海岸についたパーントゥはキャーンを外して扮装を解く。そして、海に入って仮面と身体についた泥を洗い流す。こうしてパーントゥプナハの祭祀は終了する。

3. 時代の中のパーントゥプナハ

21世紀を迎えた今日、パーントゥを取り巻く状況も大きく変わった。本節では時代の中のパーントゥプナハについて、主として島尻自治会の宮良保会長からの聞き取りに基いてまとめてみたい。

前述のとおり、パーントゥプナハは島尻地区の伝統行事であるとともに、振興の一環で観光化が模索されてきた。現在、パーントゥプナハは「パーントゥが泥を塗る奇祭」として全国的にも知られるようになった。遠くは北海道からも観光客が訪れるようになっており、宮古島観光の目玉となっている。それにともなって、パーントゥ関連の商品が製作され、村落内にある島尻購買店や、宮古島観光の中心である宮古島市の土産物店でも購入することができる。冒頭に記したように、2018年11月にパーントゥを含む10件の全国各地に残る仮面・仮装の神々が来訪神としてユネスコの無形文化遺産に登録されたことにより、パーントゥを見るために観光客が一層訪れることになることは容易に想像できるし、関連商品の売上げが伸びることによって得られる経済効果にも大きなものが期待される。

しかし、その一方で、観光客との間でトラブルが起こることもあった。例えば、パーントゥは観光客に対しても、あるいは観光客が借りたレンタカーに対しても容赦なく悪臭を放つ泥を塗りつけるので、それに観光客が怒ったケースがある。また、パーントゥに追い駆けられて転んだり、場合によっては骨折したりする事故が起こることも懸念されている。こうしたトラブルを避けるために、現在ではパーントゥ1体につき1人の見張りを付けており、パーントゥの後ろからついていくようにしているとのことである。近年、観光

に限らず様々な場面で平気でルールを無視したり、モラルに欠ける行動をとったりする観光客が増えているが、祭祀への理解も含めた祭への良識ある参加が求められているといえよう。

観光客の増加が招くもう一つのマイナスの影響は、パーントゥが身動きできないような状況が生まれていることである。パーントゥは泥を塗られまいと逃げ惑う子どもたちをどこまでも執拗に追い駆けるところにおもしろさがある。しかし、観光客の増加による人ごみの中でパーントゥが走れなくなっているという状況がある。パーントゥからは素早い動きが消え、道行く人びとにただ泥を塗って練り歩くだけとなっている。また、観光客への対応のために島尻地区の人たちが祭祀に参加することができないという状況にもある。

パーントゥナハが抱えている最大の課題は継承問題である。パーントゥナハといえ、パーントゥばかりがクローズアップされるが、本来はパーントゥが出現する前に執り行われる儀式があった。ひとつは、前述した「サトゥナハ」（里願い）と呼ばれる、上里・中里・南里の各里のムトゥ家の家族と成員の女性たちによる礼拝であり、もうひとつは「司のムトゥまわり」と呼ばれる、シマヌヌス（島の主）、ユーヌヌス（五穀の主）、ミズヌヌス（水の主）の3人の司とトゥマ（お伴）の2人による神女がウパッタヌスシバラムトゥ、トゥマズヤームトゥ、ウプヤームトゥ、ツツムトゥの4つのムトゥを祈願してまわるというものである〔比嘉：1990：91-92〕。

しかしながら、この儀式は20年ほど前から行われていない。神役の女性は「島尻生まれの女性」であるが、そのほとんどが亡くなってしまい、継承がうまくできなかったという。祭祀の日程についても、以前は女性が決めていたが、現在では男性の神役であるピューズダスが決めている。島尻地区ではパーントゥナハ以外にも女性が携わる行事があったが、それも途絶えているという。例えば、「ウヤガン」である。ウヤガンは島尻地区と狩俣地区、そして大神島の3か所で行われていたが、やはり同じ理由で島尻と狩俣のウヤガンは途絶えてしまっている。

このような祭祀儀礼の継承が途絶する懸念はパーントゥナハそのものにもつきまとっている。宮良会長は、今はまだ大丈夫だが、20年後はどうなっているかわからないという。若者たちは高校を卒業すると進学や就職でほとんどが島を出てしまい、祭祀のときだけ帰省するという者もいるが、Uターンは少ない。パーントゥを担っているのは島尻自治会青年会のメンバーであるが、資格は高校卒業後から39歳までとなっている。もし、パーントゥに扮することができる青年会メンバーが少なくなっていけば、パーントゥになれる年齢を50歳代以上にも拡大せざるをえない状況になることもあり得るという。こうした状況を受けて「保存会」を立ち上げようという話も出ているそうである。

その他、パーントゥから怖さや神秘性が失われているということも指摘されている。前述のように、パーントゥとは宮古島の方言で「怖い」「醜い」「異形の」存在を意味する言葉である。かつて、パーントゥは真っ暗闇の中から出現して子どもたちを追い駆けまわす

ということで、子どもたちに恐怖心を引き起こす存在であった。しかし、時代が進むにつれ島尻地区にも街灯が整備されることにより「闇」がなくなり、そのためパーントゥが本来持っている怖さや神秘性が失われていったのである。こうした状況に対して、比嘉康雄は「今では近代化のおかげで、夜を明るくした分だけ幻想性は希薄になり、パーントゥに対する恐れ的心情も弱くなっていることは事実であろう。今の子供たち（小中高校生）は鬼ごっこでもしているような気分で、遊びの対象としてパーントゥを受けとめているように思われる」と記している [比嘉：1990；94]。

おわりに

島尻のパーントゥナハは「奇祭」ではあるが「秘祭」ではない。島尻地区の構成員に限定された秘匿性の高いものではなく、タブーがあるわけでもない。写真撮影なども許された、域外の人びとにも開放された祭祀である。しかし、近年ではンマリガーでのパーントゥの出現場面や元島の海岸での扮装を解く場面だけは非公開になっており、写真撮影も認められなくなった。パーントゥは島尻地区の伝統行事であるとともに、時代状況に対応する中で変化してきた祭祀であったのであろう。今後、パーントゥナハはどのようになっていくのであろうか。比嘉の記した言葉を筆者の思いとして引用して本稿を締めくくりたい。

伝統を守る状況は厳しい。しかし、願わくばこれからも、パーントゥが吉日を選び源郷のンマリガーから出現し、ムトゥをまわりムラを祓い、海で草装を解くという伝統のプロセスを守り続け、神を見失わないことを、特にパーントゥの祭祀を担う青年たちに期待するほかはない [比嘉：1990；108]。

註

- (1) クバマ海岸に流れ着いたパーントゥの仮面について、岡本恵昭は、①それが赤と黒の2つであったこと、②その2つとも戦争中に失われたため、黒色の仮面を写したものが現在の「親パーントゥ」であること、③後に「中パーントゥ」と「子パーントゥ」の2つが「親パーントゥ」に似せて造られたこと、④3つの仮面の原型が「老女の赤色面」と「老翁の黒色面」の2つであったと伝えられるとしている [岡本：2011；137-138]。

参考文献

- 上野村教育委員会 [1986] 『上野村文化財調査報告集第4集 国選択無形民俗文化財記録作成宮古のパーントゥー「野原のパーントゥ」調査報告書一』。
- 大城学 [1985] 「島尻の年中行事」(平良市教育委員会 [1985] 『国選択無形民俗文化財記録作成島尻のパーントゥ調査報告書』)。
- 大城学 [1986] 『「宮古のパーントゥ」ノート』『地域と文化 沖縄をみなおすために』第39号。
- 岡本恵昭 [2011] 『宮古島の信仰と祭祀』第一書房。
- 宜保栄治郎 [1983] 「島尻・野原のパーントゥ」『沖縄県文化財調査報告集第45集 宮古の民族芸

- 能』沖縄県教育委員会。
- 佐藤純子 [2013] 「来訪する神の再解釈—沖縄県宮古島市島尻の仮面祭祀『パーントゥ』を事例として」民族芸術学会編『民族芸術』29。
- 住谷一彦・クライナー ヨーゼフ [1977] 『南西諸島の神観念』未来社。
- 諏訪春雄・川村湊 [1997] 『訪れる神々—神・鬼・モノ・異人』雄山閣。
- 平良新亮 [1985] 「パーントゥの行動」(平良市教育委員会 [1985] 『国選択無形民俗文化財記録作成 島尻のパーントゥ調査報告書』)。
- 比嘉康雄 [1990] 『神々の古層④ 来訪する鬼 [パーントゥ・宮古島]』ニライ社。
- 平良市教育委員会 [1985] 『国選択無形民俗文化財記録作成 島尻のパーントゥ調査報告書』。
- 保坂達雄・福原敏男・石垣悟 [2018] 『来訪神 仮面・仮装の神々』岩田書院。
- 吉成直樹 [2003] 『琉球民族の底流 古歌謡は何を語るか』古今書院。
- 渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編 [2008] 『沖縄民俗辞典』吉川弘文館。